

# 一般疑問文について

—その構成の諸相—

水 野 義 明

## I はじめに

私は嘗て『国際共通語』の基本問題』（明治大学教養論集 通巻65号 1971年4月）という小論の中で、人工国際語エスペラント Esperanto について所見を述べたが、その際エスペラントのいろいろな特色の中でも一般疑問文の作り方に関心を抱いた。ここで「一般疑問(文)」, general question というのは、「主語と述語動詞の結びつきについて、聴者の判断を求める疑問で、Yes, No で答えられるもの」（『現代英語学辞典』成美堂 1973年）のことを指し、疑問詞（疑問代名詞、疑問副詞）を含む「特殊疑問(文)」 special question, 「選択疑問(文)」 alternative question, 「付加疑問(文)」 tag-question などとは異なり、日本語では疑問助詞「～か?」を用いて表わされる疑問文である。

さて上述のエスペラントでは、この一般疑問文は次ぎのような方法によって作られる。

1. 疑問助詞  $\hat{c}u$  を用いる,
2.  $\hat{c}u$  を疑問文の文頭に置く,
3. 疑問文を上昇音調（尻上りの抑揚）にする。

いくつか実例を挙げてみよう。（なおエスペラントの発音は、 $\hat{c}=[tʃ]$ ,  $\hat{g}=[dʒ]$ ,  $\hat{j}=[ʒ]$ ,  $j=[j]$ ,  $\hat{u}=[w]$  であり、あとはすべてローマ字式に読む。ア

クセントは常に最後から二番目の音節にある。e. g. libro [li:bro] 本, ĉiuj homoj [tʃi:uj hó:moj] すべての人々。↗ ↘などは音調を示す。

Vi estas studento. あなたは学生です。

→ Ĉu vi estas studento?

Tio estas tablo. それはテーブルです。

→ Ĉu tio estas tablo?

Hundo kuras. 犬は走る。

→ Ĉu hundo kuras?

Ili laboras diligente. 彼等は勤勉に働く。

→ Ĉu ili laboras diligente?

このうち、音調については各言語に普遍的に見られる現象であるが、疑問助詞の使用及びその位置については、ヨーロッパの諸言語にはあまり見あたらないことであり、エスペラントの大きな特色のひとつと言えるであろう。よく知られているようにエスペラントの創始者ザメンホフ Lazaro Ludviko Zamenhof (1859-1917) は、ユダヤ系のポーランド人で眼科医を職業とするかたわら、国際（共通）語の問題に深い関心を抱き、1878年にその草案を完成し、1887年国際語エスペラントとしてこれを公表した。ザメンホフはその国際語試案の作成にあたって、英、仏、独、露などヨーロッパの有力言語やラテン語、ギリシャ語などの古典語をその根幹としたのであるが、これらの言語の一般疑問文の作り方は踏襲しなかったのである。そこでエスペラントの疑問助詞というアイデアをザメンホフはどこから得たのかという疑問が生ずる。結果的には当然至極のことであるのだが、ザメンホフはこのアイデアを自分の母国語のポーランド語から得たことがわかった。すなわちポーランド語には、エスペラントの ĉu にまさに一致する疑問助詞 czy [tʃi] が存在するのである。ポーランド語の一般疑問文は czy を文頭に置き、上昇音調になるという点で前述のエスペラントの一般疑問文の構成と同じである。いくつかの例を挙げてみよう。

(j=[j], cz=[tʃ], y=[i], ó=[u:], w=[v'] 軟音, アクセントは語末から第二音節にくる。)

To jest dom. これ(それ)は家です。

→ Czy to jest dom?

Ma czas. 彼(彼女)は時間をもつ(=ひまである)。

→ Czy ma czas?

Pani mówi po-polsku. あなたはポーランド語を話します。

→ Czy Pani mówi po-polsku?

しかしザメンホフがエスペラントの一般疑問文の作り方を定めたのは、単に母国語のパターンに追従したのみと考えるのは早計であると思う。彼が常に念頭に置いていたのは、エスペラントは国際語であり、すべての人々の意思疎通の手段として完璧な論理性、明晰性をもたねばならないということであった。この点から見て、ポーランド語の一般疑問文の作り方がたまたま彼の理想とするところに一致していたので、これを採用したと考える方が妥当であろう。すなわち、1) 疑問助詞の使用によって一般疑問文であることを明示し、2) これを文頭に置くことによって発言の基本的性格(疑問、質問)をまず聴者に伝え、3) さらに上昇音調によってこれを聴者に確認させ、同時に判断、返答をうながすという、いわば三重の手続きをふむことにより、一般疑問文の意図が誤解の余地がないほどに完全に表明されているのである。

ところで、エスペラントの一般疑問文の作り方を機縁として、その他の諸言語ではこの関係はどうなっているのかということに興味が生じ、手許にある各国語の辞書、文法書、学習書の類にあたってみた結果に基き次ぎのような対照表を作成した。結論的には、あまり明確な傾向を発見できず、一般疑問文の性格を要約するまでに到らなかったが、今後もこの問題を考えるときの一助にもなろうかと考え、敢えてこの小論をまとめた次第である。

参考文献をいちいち列挙するのは煩雑に亘るので必要な場合以外は省略し

た。語例、用例などはすべてローマ字表記にした。対象とすべき言語には、いわゆる旧世界の言語とは異質の構造をもつ極北諸民族語（エスキモー語など）、アメリカ・インディアン諸語、オーストラリア古語（タスマニア語など）をも取りあげるべきであるが、資料不足のため割愛した。

## Ⅱ 一般疑問文の作り方

### 1. 各言語対照表

以下に挙げるのは、一般疑問文の作り方を類別、対照したものである。類別の基準は次ぎの通りである。

#### A類 疑問助詞を有する言語

A I 疑問助詞が一般疑問文にもその他の疑問文にも用いられる言語

A II 疑問助詞が一般疑問文にのみ用いられる言語

#### B類 疑問助詞を有しない言語

B I 語順倒置その他の文法的手続きによって一般疑問文を表示する言語

B II もっぱら音調によって一般疑問文を表示する言語

また表中疑問助詞の類別は次ぎの基準によっている。

a類 文末に置かれるもの

b類 文頭に置かれるもの

c類 文中で疑問の対象となる語につけられるもの

なお音調については、上昇音調をとるものが圧倒的に多数であるため、特に比較の対象にはしなかった。

言語番号	言語名	類別	疑問助詞
①	日本語	A I a	KA
②	沖縄語	A I a	GA
③	朝鮮語	A I a	KKA
④	モンゴル語	A II a	OO, UU

言語番号	言語名	類別	疑問助詞
⑤	トルコ語	A II a	Mİ
⑥	ウズベク語	A II a	Mİ
⑦	ハンガリー語	A II c	E
⑧	フィランド語	A II c	KO, KÖ
⑨	エストニア語	A II b	KAS
⑩	インドネシア語	A II b(c)	APA, KAH
⑪	タガログ語	A I c	BA
⑫	サモア語	A I b(a)	PE, PO, 'EA
⑬	ニューギニア・ビジン	B II	—
⑭	中国語	A II a	MA
⑮	ベトナム語	B II	—
⑯	タイ語	A II a	LU, MAI
⑰	ビルマ語	A I a	LĀ, LÊ
⑱	カンボジア語	A II a	RYY TEE
⑲	アラビア語	A II b	HAL, A
⑳	マルタ語	B II	—
㉑	ヘブライ語	A II b	HAIM, HA
㉒	イディッシュ語	A II b	TSEE
㉓	スワヒリ語	B II	—
㉔	ハウサ語	A II a	KŌ, NĒ
㉕	サンスクリット	A II b	KAC-CIT, KĪM
㉖	ヒンディー語	A II b	KYĀ
㉗	ウルドゥー語	A II b	KYĀ
㉘	パンジャビ語	B II	—
㉙	ペルシア語	A II b	ĀYĀ
㉚	ロシア語	A II c	LI
㉛	ポーランド語	A II b	CZY
㉜	チェコ語	B II	—

言語番号	言語名	類別	疑問助詞
㉓	セルボ・クロアト語	A II c	LI
㉔	ラトビア語	A II b	VAI
㉕	ギリシア語	B II	—
㉖	ラテン語	A II c	NE
㉗	フランス語	B I	—
㉘	イタリア語	B I	—
㉙	スペイン語	B I	—
㉚	ポルトガル語	B II	—
㉛	ルーマニア語	B II	—
㉜	ウェールズ語	A II b	A
㉝	ゲール語	A II b	A
㉞	アイルランド語	A II b	AN
㉟	アイスランド語	B I	—
㊱	ノルウェー語	B I	—
㊲	デンマーク語	B I	—
㊳	スウェーデン語	B I	—
㊴	オランダ語	B I	—
㊵	ドイツ語	B I	—
㊶	英語	B I	—

## 2. 対照表の注解と用例

以下では、特に注解を必要としないものは省略した。用例はそれぞれ該当の文献によっているが一部修正したものもある。①, ②などは対照表中の言語番号を示す。用例の説明中, ( ) は原語では明示されないことを表わす。

### ③ 朝鮮語

Tangsin-ün chosön-saram-imnikka?

あなた-は 朝 鮮-人 です-か?

Kügös-ün muös-imnikka?

それ-は 何-です-か?

④ モンゴール語

Chi tuuniyg nökhört ögöv uu?

君(は) それを 友人に 与えた か?

Ene yoo baina?

これ(は) 何 です(か)?

疑問助詞 OO と UU は先行する語の母音の性質によって使い分けられる。

すなわちアルタイ系諸語に特有の母音調和による。

⑤ トルコ語

MÍ はモンゴール語と同じく、母音調和の法則にしたがって MÍ, MÜ, MI, MU の4形がある。附属語が文末にあるときは、その前に入ることもある。

~midir? (～である-か?)

Bu mektup kalem ile yazdı mi?

この手紙(は) ペン で書いた か?

O günü siz nerede idiniz?

その 日 あなた(は) どこにいた(か)?

⑥ ウズベク語

MÍ の用法はトルコ語と同様、ただし無変化。

音調は MÍ のところで下降する。

Siz Uzbekca bilasiz-mi?

あなた(は) ウズベク語を わかる-か?

⑦ ハンガリー語

文頭の語に -e をつけて疑問文にすることもある。

A bor jó → Jó-e a bor?

冠詞 ワイン 良い

ただし一般には語順の倒置による。

Az atya van itt.

冠詞 父(は) いる ここ

→ Van az atya itt? (ここにいるか?)

→ Hol van az atya? (どこにいるか?)

⑧ フィンランド語

ko, kö の区別は母音調和の法則による。

Onko poika koulussa?

いるか 少年(は) 学校-に?

少年は学校にいるか?

Koulussako hän on?

学校にか 彼(は) いる?

彼は学校にいるか?

Missä kirja on?

どこに 本(は) ある(か)?

⑨ エストニア語

See on tahvel. → Kas see on tahvel?

これ(は) である 黒板 (～が?)

Mis see on? これは何ですか?

何 これ(は) である(か)?

⑩ インドネシア語

KAH は平叙文の文末に置かれるか、疑問とすべき語に接尾して文頭に置かれる。

APA は疑問助詞として文頭に置かれる。(疑問代名詞 APA と同形である。)

APAKAH 疑問代名詞 APA との混同を避けるため、疑問助詞 APA に KAH をつけたもの、文頭にくる。

Ia datang besokkah? 彼は明日来るか?

彼 来 明日 か

Besokkah dia datang? 彼が来るのは明日か?

か 彼

Apa (Apakah) dia datang besok? 彼は明日来るか?

か

Apa ini? これは何か?

何(か) これ

⑪ タガログ語



BA は語頭の疑問とすべき語のあとに置かれる。疑問詞のあとにもつくことがある。

Silá ba ay áalis na? 彼等はまだ出かけるのですか?  
彼等 か ある 去る 既に

Malinis ba ang batà? その子供は清潔か?  
清潔 か 冠詞 子供

Anó ba ang gustó mo? 君は何が好きですか?  
何 か 冠詞 好み 君の

Anó ba ang pangálan ninyo? 君の名は何か?  
何 か 冠詞 名前 君の

⑫ サモア語

PE, PO を文頭に置くか, 'EA を動詞のあとに置く。PE, PO と 'EA を併用することもある。

Pe e i ai se tusi i luga o le laulau? 机の上に本があるか?  
か 本 上 机

Ou te pepelo 'ea? 私はうそつきか?  
うそ か

Po'o ai 'ea? それは誰か?  
か か

⑬ ニューギニア・ピジン

多くは音調によって一般疑問文を示すが、地方によっては文末に a?, no?, laka? などをつける。

⑭ 中国語

疑問助詞「么」ma を文末に置くほか、肯定否定のかさねであらわす。

Nǐ yuànyì ma? 君は希望するか?  
君 願 か

Nǐ yuànyì-bu yuànyì?  
不

⑮ ベトナム語

一般疑問文を表わすのに、Có...không, đã...chu'a を用いることがあるが、これは「もつ...否定」「完了...未完了」を本来意味し、純粹の疑問助詞とはいえない。

⑩ タイ語

LU は疑問助詞「～か」に相当、MAI は「～なのか…でないのか？」を表わす。

Khu pay. あなたは行く。

→ Khun pay may?  
か

Kaw yu. 彼はいる。

→ Kaw yu may?  
か

⑪ ビルマ語

θú zăgăbyánlâ? 彼は通訳か?

彼 通訳 か

bá louθθâlê? 何をしているのか?

何 する か

⑫ カンボジア語

Look coul cuht tyk tae-ee ryy tee? 君は茶を好むか?

茶

Nih cii-uh uh-ii? これは何(か)?

これ 何

⑬ アラビア語

hal anta yābāniy? あなたは日本人ですか?

か あなた 日本人

a-anta yābāniy?

か

mā anta? あなたは何ですか?

何(か) あなた

⑭ ヘブライ語

ata rotze kafe.  
あなた 飲む コーヒー

→ haim ata rotze kafe?

か

ha tertze kafe?

か 飲む(2人称, 未来)

疑問助詞 ha を用いるときは動詞を未来形にする。

㊸ イディッシュ語

TSEE はポーランド語 czy に由来か。

Tsee iz dehr VEG ah Goo-tehr? 道路は良いか?

か ある 冠詞 道 冠詞 良い

VAW-sehr SHTEH-t'l iz DAWS? これはどんな町か?

どんな 町 ある これ

㊹ ハウサ語

Kanà dà kudí ko? 君は金をもっているか

君に ある 金 か

Mènè nè wannàn? これは何(か)?

何 これ

㊺ サンスクリット

Kác-cit は肯定の答を予想し, kím は本来「何, 何故」の意で否定の答を予想する。

㊻ ヒンディー語

KYĀ は疑問詞としては「何?」を意味する。ベンガル語 KI も同様。

Yeh ghar hai. これは家です。

これ 家 です

Kyā yeh ghar hai? これは家ですか?

か

Yeh kyā hai? これは何ですか?

何

㊼ ペルシャ語

āyā in ketāb ast? これは本ですか?

か これ 本 である

īn chist? これは何ですか?

これ 何 である

㊿ ロシア語

ロシア語の疑問文はふつう疑問助詞を用いず、ロシア語固有の疑問音調によって表わされる。LI は日本語の「か」に相当するものの、むしろ強意（話者の疑惑）の表示に使われるとされる（「岩波ロシア語辞典」による）。

Daleko li otsjuda? ここから遠いのか?

遠い か

Ne pojti li nam todje? 我々も行ったらどうだろう?

否定 行く か 我々に また

㊿ ポーランド語

Czy rozumiesz? わかりますか?

か (君は)わかる

Co to jest? これは何ですか?

何 これ である(か)

㊿ ラトビア語

Vai māte mājā? 母は在宅か?

か 母 家に

Kur ir māte? 母はどこにいるか?

どこに いる(か) 母

㊿ ラテン語

NE は疑問の対象となる語に後接されて文頭にくる。このほか Nōnne（肯定の答を予期）、Num（否定の答を予期）もあり、いずれも文頭に置かれる。

Servumne amās? 君は奴僕を愛するか?

好僕 か (君は)愛する

Nōnne servum amās?

Num servum amās?

㊿ フランス語

C'est un livre.

これ(それ), である, 冠詞 本

→ 1. Est-ce un livre?

2. Est-ce que c'est un livre? これは本ですか?

1. Qu'est-ce?

2. Qu'est-ce que c'est? これは何ですか?

短形 (1.), 長形 (2.) とともに文頭に語順倒置形 (VS) を置いて一般疑問を示している。

㉘ イタリア語

Questo è un quadro. これは絵です。

これ である 冠詞 絵

→ È questo un quadro?

ただし特殊疑問文では, 語調の関係もあり必ずしも倒置形とはならない。

Dov'è l'ufficio? オフィスはどこですか?

Che cosa è? (それは)何ですか?

㉙ スペイン語

Es blanca la manzana? りんごは白いか?

である

Mira Vd. el naranja? あなたはオレンジが見えるか?

見る あなた

特殊疑問文でも倒置がふつうである。

㉚ ウェールズ語

Yr wŷf i ... .. 私は...である。

A wŷf i ...?

か

㉛ ゲール語

A bheil mi? 私は...であるか?

か

㉜ アイルランド語

An bhfuil na sceana glan? ナイブ(複)はきれいか?  
か

④⑤ アイスランド語

Hefur þú komið til Reykjavíkur?  
have you

あなたはレイキャヴィクへ来たか?

④⑥ ノルウェー語

Er du der 君はそこにいるか?  
いる 君

Kan du høre meg? 君は私(の言うこと)が聞えるか?  
できる

④⑦ デンマーク語

Er hr. Hansen ung? ハンセン氏は若いか?  
である

Kommer du i morgen? 君は明日来るか

④⑧ スウェーデン語

Har du läst morgontidningen? 君は朝刊を読んだか?  
have read

Tala De svenska? 彼等はスウェーデン語を話すか?  
話す

④⑨ オランダ語

Hebben jullie een klok? 君達は時計をもっているか?  
have you

Geloof je hem niet? 君は彼を信じないのか?  
信ずる

⑤⑩ ドイツ語

Ist das ein Buch? それは本か?  
である

Wollen Sie hier kommen? あなたはここへ来てくれますか?

Was ist das? それは何ですか?

Wie heißt es? . . . それは何といいますか?

特殊疑問文でも語順の倒置が行なわれている。

㊦ 英語

用例を挙げるまでもなく、一般疑問文、特殊疑問文ともに語順倒置が行なわれる。ただし疑問助動詞の do を有するのは、同系のゲルマン諸語の中で英語だけの特色である。

You go there. 君はそこへ行く。

→ Do you go there?

He wants help. 彼は助けを求める。

→ Does he want help?

この do の用法を疑問助詞に準ずるものとする説もあるが、1. do は発生的には動詞であり、人称、数、時制の変化をとどめている、2. あらゆる一般疑問文に適用されるわけではない、という理由で、この説は受入れがたい。

### 3. 対照表の分析

以上の対照表にとりあげた諸言語を、類別すると次のようになる。

#### A類 (疑問助詞を有するもの)

A I 日本語、沖縄語、朝鮮語、ビルマ語、タガログ語、サモア語

A II モンゴール語、トルコ語、ウズベク語、ハンガリー語、フィンランド語、エストニア語、インドネシア語、中国語、タイ語、カンボジア語、アラビア語、ヘブライ語、イディッシュ語、ハウサ語、サンスクリット、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語、ロシア語、ポーランド語、セルボ・クロアト語、ラトヴィア語、ラテン語、ウェールズ語、ゲール語、アイルランド語、

#### B類 (疑問助詞を有しないもの)

B I フランス語、イタリア語、スペイン語、㊤から㊦までのゲルマン諸語

B II ニューギニア・ピジン、ベトナム語、マルタ語、スワヒリ語、パン

ジャブ語, チェコ語, ギリシア語, ポルトガル語, ルーマニア語

以上の各部類に属する言語の数と, その語族, 語群関係は次ぎの通りである。(ここで「語族」というのはその系統関係が確立されている諸言語のグループ, 「語群」というのは系統関係は確証がないが, 形態その他の類似点があり, 便宜的にグループとして扱われるものを指す。諸言語の分類は「国語学辞典」, 東京堂, 1957年に従った。)

A I 6, アルタイ語類似言語, チベット・ビルマ語族, ポリネシア語族

A II 26, アルタイ諸語, ウラル語族, インドネシア語族, シナ語, タイ語, モン・クメル語族, セム語族, バントゥー語族, 印欧語族(インド・イラン語派, バルト・スラヴ語派, イタリアック語派, ケルト語派)

B I 10, 印欧語族(イタリアック語派=ロマンス諸語, ゲルマン語派)

B II 9, タイ語またはモン・クメル語, セム語, バントゥー語族, 印欧語族(インド・イラン語派, バルト・スラヴ語派, ギリシア語派, イタリアック語派)

ここで「語族」や「語群」を問題にするのは, 同じグループに所属する個々の言語は, 互に類似点が多く, 特定の言語現象についてグループに関係なく個々の言語の絶対数を挙げるだけでは, 世界の言語全体の傾向を判断するわけにいかないからである。言いかえれば系統や構造を異にする各言語グループ間の比較対照が必要ということである。

さて, 疑問助詞の有無を中心とする上述の分析結果からどういうことが言えるであろうか。

先ずA Iの部類については, 言語グループ数が比較的限られていることが挙げられる。疑問助詞をすべての種類の疑問文に用いるのは, ⑫, ⑰という散発的な例を除けば, 日本語, 朝鮮語に特有の現象であると言うことができる。



次にAⅡの部類に関しては、言語グループの数が多様で、アジア、アフリカ、ヨーロッパに亘って分布している。疑問助詞によって一般疑問を明示しようという特色は普遍的であるとも言えるが、一方では疑問詞を含む疑問文では疑問助詞を用いないという傾向が強いことにも気がつく。これはいわゆる「言語の経済」の原則によるものであろうか。

BⅠについては 言語グループが印欧語の中でもロマンス諸語とゲルマン諸語に限られていることが特徴である。これらの言語には英、仏、独、スペインなど現代世界の有力言語を含んでいるので、疑問文の語順倒置というパターンはきわめて普遍的現象であるかのような印象を与えるが、事実世界の言語のごく一部の部類の特色にすぎないことがわかる。

BⅡの部類は該当言語の数は少ないが、言語グループという点では多様である。疑問助詞の有無にかかわらず、疑問文は特有の音調を有することは一般に見られることであるが、前述の「言語の経済」の原則から言うところのBⅡ類がもっとも合理的ということになる。

さらに、どんな言語でも（と言って差支えないと思うが）、一般疑問文は特別の手続きによらず平叙文に疑問を示す音調をつけて表わすことができる（「君行く？」<sup>↑</sup> “He’s dead?”<sup>↑</sup> など）ので、このBⅡ類はいわば一般疑問文の原型であるとも言えるだろう。

### Ⅲ 疑問助詞について附言

はじめにも述べたように、この小論では各言語の一般疑問文の作り方を概観するのを目的としたのであるが、残念ながら資料の収集の域におおむねとどまった。以下には、あまり確証はないが、疑問助詞について思いついたことを2、3つけ加えて蛇足としたい。

#### 1. 疑問助詞の分布

対照表の諸言語のうち5、6割以上、語族語群としてはすべての種類に亘って、疑問助詞が用いられていることは、すでに見た通りであるが、このうち

AI類、すなわち、日本語に見られるような疑問助詞の用法はどちらかといえば  
独得のものである。「岩波古語辞典」によれば、日本語の疑問助詞「か」は  
「表現者自身の内心の疑問を自分自身に投げかける意が原意」であり、これが  
発展して慨嘆、反語、願望をも表わすようになったとされている。一説によれ  
ば、「か」の原型は「彼(か)」であり、陣述の内容を自分自身から一旦遠ざ  
けて見ることにより、間接的に疑問、不確定の意を表すとのことであるが、も  
しそうならばこれは朝鮮語の KKA (疑問助詞) と KŪ (代名詞 それ、か  
れ) の関係と同じである。文中の位置は異なるが、インドネシア語の KAH,  
フィンランド語の ko, kō, エストニア語の KAS も k 音をもって始まる点  
で類似している。これらの言語は、日本語の系統を論ずる際に引き合いに出さ  
れる「ウラル・アルタイ諸語」「南島諸語」に関連があり、疑問助詞のような  
頻用語の比較対照は、日本語の起源についても何らかの示唆を与えていると思  
われる。

## 2. 疑問助詞の由来

日本語の「か」については前述したが、古典期には更にもうひとつの疑問詞  
「や」が存在した。「岩波古典辞典」によれば、「や」は「最も古くは感動詞と  
して、掛け声に用いられた語」であり、「相手にかかわって行く気持を表わす」  
関係上、やがて質問、命令、反語の意味にも使われるようになった。呼びかけ  
の語としての YA, YĀ は朝鮮語やアラビア語にも存在し、特に前者では NYA  
という形として体言につく疑問助詞となっている。

ところで疑問助詞についてはやや孤立的状態にある日本語や朝鮮語を別とす  
ると、一般に疑問助詞は疑問詞(特に「何?」を示すもの)に由来するよう  
に見える。たとえばインドネシア語の APA は同時に「何?」という疑問代名  
詞であり(タガログ語の BA はこの APA と同語源であろう)、トルコ語、  
ウズベク語の MĪ については系統的に近いとされるハンガリー語に MI  
(「何?」)があり、ヒンディー語、ウルドゥー語の KYĀ もそのまま「何?」  
の意味に使われている。(ベンガル語では KI となる。)また印欧語について

は、ポーランド語の *czy* は音韻的に疑問詞の *co* [tso], *kto* [kto] (「何?」「だれ?」) の頭音に関係があり、一般的にはロシア語の *Ч* [tʃ] などとともに、ラテン語、ロマンス諸語の *qu-* [k(w)-], ゲルマン諸語の *wh-*, *hw* にもつながるものであり、これらはすべて疑問代名詞、疑問副詞などの頭音となっている。話題とするところを先ず問いかけの形で表明し、それから疑問の具体的内容を陳述するというのは言語心理から言っても当然である。

### 3. 疑問助詞の位置

最後に疑問助詞の文中における位置についてふれてみたい。前掲の対照表中疑問助詞を有する言語 (A類) をその位置について分類すると次のようになる。

#### a 群 (疑問助詞が文末にくるもの)

日本語、沖縄語、朝鮮語、モンゴール語、トルコ語、ウズベク語、中国語、タイ語、ビルマ語、カンボジア語、ハウサ語

#### b 群 (疑問助詞が文頭にくるもの)

エストニア語、アラビア語、ヘブライ語、イディッシュ語、サンスクリット、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語、ポーランド語、ラトビア語、ウェールズ語、ゲール語、アイルランド語

#### c 群 (その他のもの、または a 群、b 群の用法にも亘るもの)

フィンランド語、ハンガリー語、インドネシア語、タガログ語、サモア語、ロシア語、セルボ・クロアト語、ラテン語。

大まかな傾向としては、a 群にはいわゆる膠着語や孤立語が入り、b 群にはいわゆる屈折語が入る。「膠着語」というのは「国語学辞典」(東京堂、1957年)によれば、「文法的機能が、実質的意味を示す独立の単語(あるいは語幹)に、文法的意味を示す独立しない形式(「膠着」 *agglutination*) によって果される言語」のことで、「日本語、朝鮮語、アルタイ諸語、フィン・ウゴル語な

どがその代表」であり、「孤立語」とは「単語はそれだけでは単に実質の意味のみを示し、互に孤立的に配列される独立の形式であって、文法的機能は語順によって果される言語」であり、「中国語およびその系統の言語が代表」とされている。また「屈折語」とは、同辞典によれば、「単語の実質の意味を表わす部分と文法的意味を表わす部分とが、分離できないほど緊密に結合してそのために単語そのものが、文中における他の部分に対する文法的関係をも表わし、さらにその語形の交替——これを屈折 (inflexion) と言う——によって、種々の文法的機能を果す言語」であり、「印欧語族、ハム・セム語族の諸言語がその代表」である。

c 群に属する言語は少数ではあるが上記の3種の言語形態に亘っていて、中間的、混交的状況を呈している。

さて疑問助詞の用法(位置)と言語の形態的分類とを関連させる上述の概括は一部の例外を除いてはうまく事態を説明していると思われるが、それと言うのも疑問助詞の位置は各言語の言語構造によって必然的な制約を受けるという事情が存在するからである。

簡単に言えば、膠着語の構造は、「実詞+附属詞」であり、たとえば英語のSV構文などは、「名詞+格助詞+動詞 (+助動詞+助詞)」という形で表わされ、肯定否定、推量、疑惑その他表現者の主観的な心的状況の表示に関する部分は、文末に到ってはじめて明示されるという構造である。したがって疑問詞が文末にくるのは当然となる。これに対し孤立語の場合には膠着語や屈折語にあるような、各語の文中の他の部分へのかかわり合いを示す文法的手段がないために(後に発達した介詞などは別の問題として)、いきおい各語や語句は文中で一定の語順をもつ傾向が強くなり、もし語気を示す助詞などがその中間に介入してくると、各語間の統語関係が失なわれて、伝達に支障をきたすことになる。(たとえば、中国語で *Nǐ rènshi tā ma?* 「君は彼を識っているか」は、*Ni ma rènshi tā* 「君か 彼を識っている」、*Ni rènshi ma tā* 「君識っているか? 彼(文をなさず)」ということになる。)したがって一定の語グループが全体として疑問の対象になっていることを示すためには、膠着語とは別の理

由で、疑問助詞が文末に来なければならなくなる。

一方、屈折語では前述の辞書の説明のように、各語がそれ自身の中に文法的手段を包含しているので、起源的には単語が文の機能を果す *sentence-word* とも言うことができ、言い換えれば語順によってはあまり制約されない。(たとえば、ラテン語で *Pater* (父は) *amat* (愛する) *filium* (息子を) は、

*Pater filium amat, Filium pater amat, Filium amat pater, Amat pater filium, Amat filium pater* などいずれも多少のニュアンスの相違はあるが本質的意味は変らない。) 後世に到って屈折が単純化したために語順が固定化する傾向が生じたが、本来は(伝達を阻害しない枠内で)各単語は文中どこに置かれてもよいのである。他に制約条件のないときは、最少の労力で最大の効果(伝達性 *communicability*)を求めるが「言語の経済」の原則であるので、屈折語において特に疑問助詞が文頭に置かれる傾向が強いことは、不思議ではない。

(1978年9月28日)